

反貧困運動と行為者の形成

——2000年代の社会的排除をめぐる社会運動——

茨城大学 稲葉奈々子

1 目的

本報告では、日本で2000年代以降に活性化してきた社会的排除をめぐる社会運動に参加する個人が行為者として「ポスト近代的」な特徴を備えるに至った過程を分析する。近年、社会的排除に異議を申し立てる運動は、もっぱら「居場所」や「自分探し」として分析され、運動のイシューそのものは副次的なものとしてしか扱われていないか、単純に、新自由主義へのカウンター運動として位置づけられてきた。実際には、2000年代の運動の直接民主主義など〈技法〉へのこだわりは、言説レベルだけではなく、生きている空間を含めた身体レベルでの変革を指向している。これは個人レベルでの「自己変革」ではなく、公共空間の占拠をつうじて運動の目的を実現しようとするものである。これらの運動は2000年代の小泉政権下で誕生したものが多く、「近代的な自立した個人」を前提とした社会制度に異議を申し立てる。ミクロな個人の行為が、マクロな新自由主義的な政策によって規定されつつ、それに抵抗する行為を生み出す過程を明らかにするのが本報告の目的である。

2 方法

2000年代以降の社会的排除に反対する運動の担い手（野宿者やフリーター）に対して行ったインタビューおよび反グローバリズム運動やメーデーなど抗議行動の参与観察によるデータを用いる。野宿者運動やフリーター労組の運動は、既存の制度のなかで法制度を変えていこうとする運動（目的達成のための運動）と、運動の実践過程そのものをオルタナティブの過程としようとする運動（目的と手段を分離しない運動）が併存してきた。このふたつの特徴を構成する論理を明らかにする。

3 結果

野宿者やフリーター運動は既存の法制度のなかで申し立てをすると、社会保障制度によりカバーされることを求めることになる。近代の社会保障制度は、制度に適合的な個人を求めるがゆえに、とくに生活保護の適用を受ける個人は、近代的な自立的な個人たる資質が欠けているとして訓練の対象となる。このように自立的な個人たり得ない行為者とみなされている点が、労働運動や女性運動など、権利擁護を掲げるその他の運動と、社会的排除に異議を申し立てる運動の大きな違いである。また、「近代的な自立的個人」という前提は、新自由主義的な「自己責任」を果たす個人と調和する。そのため、野宿者やフリーターなど社会的に排除された個人を担い手とする運動は、2000年代には新自由主義に対抗する運動として表出されてきた。

4 結論

2000年代の運動は、新自由主義に対抗する運動として短期的な時期区分で特徴付けられてきたが、近代社会が前提とする自立的な個人たることが極限まで要請されるようになったと考えるべきであり、長期的な時期区分での考察が必要である。

文献

Dubet, François, 2004, *Les inégalités multipliées*, Paris: Seuil(l'édition de poche).

稲葉奈々子 2011 「社会的排除に抗する社会運動のオルタナティブ性」 『理論と動態』 第4号、pp.8-23.

Melucchi, Alberto, 1996, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, Cambridge: Cambridge University Press.